

# 学部における心理学専門教育の 導入に関する一研究（2）

～学習経験が心理学に対するイメージの変容に及ぼす影響～

芳賀 康朗・川島 一晃・望木 郁代<sup>1)</sup>

〈要旨〉 本研究では、学生が抱いている心理学に対するイメージの構造を明らかにし、専門講義の受講経験がイメージ変容に及ぼす影響について分析を行った。心理学の初学者102名、非初学者75名を対象とした質問紙調査を行った結果、心理学に対するイメージは「役立ち」因子、「実証科学」因子、「似非科学」の3因子から構成されていることが明らかにされた。また、「似非科学」因子と「役立ち」因子を構成する項目に対する評定は初学者のほうが高く、「実証科学」因子を構成する項目に対する評定は非初学者のほうが高い傾向が確認された。この結果から、受講経験を通じて心理学の実証科学的特徴の理解は促進されるものの、心理学の有用性に対する疑念や失望感も高まる可能性があることが示唆された。初学者の学習意欲を削ぐことなく心理学の実像を伝え、心理学学習の具体的意義を呈示することが大学・教員側には要求されると考えられる。

〈キーワード〉 心理学のイメージ、心理学教育、初学者

## 1. はじめに

皇學館大学文学部コミュニケーション学科に心理学の専門教育カリキュラム

が導入されてから約3年が経過した。授業を担当している筆者たちは、科目間での講義内容の調整や実験・検査実習用器具の整備などに追われているが、学生の関心や受講後の感想などをアンケートやインタビューによって収集し、授業改善に役立てる試みも行ってきた。

芳賀・川島（2015）は、入学後最初に受講する心理学の専門科目である「心理学概論Ⅰ」の受講生を対象として、心理学に対するイメージや受講後の感想などを収集する質問紙調査を実施した。「錯覚」、「無意識」、「モチベーション」、「臨床心理士」といった学問のかつ具体的なキーワードも散見されたが、「催眠術」、「マインド・コントロール」、「メンタリスト」、「相性判断」といったような非科学的なイメージも数多く確認された。また、心理学の学習が自己理解や人間関係の構築に役立つことを期待する声が多かった一方で、受講後には、「自分がイメージしていた心理学とは違った内容だった」、「もっと人の心を読む方法について触れてほしかった」、「数学や理科の内容ばかりだった」といった失望や落胆を感じさせる感想も寄せられた。

専門的学習を始める前の大学生は心理学の研究対象や目標を過剰に狭く認識しており、「科学としての心理学」という観点が欠落していることを工藤・鈴木・小林（2004）は指摘している。このような傾向は上述の芳賀・川島（2015）の結果と共通するものであり、「心」という魅力的ではあるが実体が不明瞭な対象を研究する心理学の特徴であるともいえるだろう。さらにその魅力や不思議さゆえにテレビ番組や雑誌などのマスメディアで取り上げられる機会も多く、学問の実像と乖離したステレオタイプなイメージが学習前に形成されてしまうのかもしれない。

しかし心理学に対する非科学的なイメージは必ずしも固定化されるのではなく、大学での学習経験によって変化することが先行研究で報告されている。心理学のイメージを回答させた松井（2000）の研究では、半年間の講義受講後には「科学的」、「人間の行動や感覚に理由を与える体系的な学問」といった講義前にはほとんど見られなかったイメージが数多く報告されるようになったことが示されている。また、小城・坂田・川上（2010）の研究では、占いやおまじないなどの不思議現象に対する態度が半年間の受講経験によって批判的な

方向に変容したことが示されている。入学後の早い時期に心理学の誤ったイメージを払拭して実証科学としての実像を説明し、研究の目的と意義をわかりやすく伝えることは、専門教育のスタートにおいて不可欠な作業といえるだろう。

本研究の第1の目的は、心理学の講義科目を受講する学生が入学前にどの程度に関心と学習意欲を抱いていたのかを把握し、コミュニケーション学科で心理学の専門教育を展開することに対するニーズを探ることである。第2の目的は、学生が心理学に対して抱いているイメージの構造を検討するとともに、そのイメージが学習経験を通じてどのように変容していくかを明らかにすることである。以上の目的のもとに調査研究を行うことで、心理学を志す学生の特徴を理解し、カリキュラムの改善に役立つ基礎資料が得られることが期待される。

## 2. 方法

### 調査対象者

皇學館大学学部学生 198 名。内訳は 1 年生 119 名（男性 80 名、女性 39 名）、2 年生 56 名（男性 31 名、女性 25 名）、3 年生 23 名（男性 15 名、女性 8 名）であった。このうち 1 年生（平成 28 年度入学生。これ以降「初学者」と表記する）に対しては、入学後初めて受講する心理学の授業である「心理学概論Ⅰ」の第 1 回授業開始前に実施した（平成 28 年 4 月 12 日）。2・3 年生に対しては「学習心理学Ⅰ」または「臨床心理学Ⅰ」のいずれかの第 1 回授業開始前に実施した（平成 28 年 4 月 12 日または 14 日）。調査対象の 2・3 年生（平成 26・27 年度入学生。これ以降「非初学者」と表記する）は、調査実施時までに「心理学入門」や「心理学概論Ⅰ・Ⅱ」などの心理学系科目を少なくとも 1 科目受講した経験がある学生に限定した。

### 調査項目

回答者の属性（性、年齢、学年、所属学科）を尋ねる質問と、心理学への関心やイメージを尋ねる多肢選択式の 4 つの質問から構成された。

質問 1 は、皇學館大学文学部コミュニケーション学科に心理学の授業がある

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（2）（芳賀・川島・望木）

ことを入学前に知っていたかどうかを尋ねる質問であった。選択肢は「とてもよく知っていた」、「よく知っていた」、「すこし知っていた」、「あまり知らなかった」、「まったく知らなかった」の5つであった。

質問2は、大学入学前に心理学にどの程度興味をもっていたかを尋ねる質問であった。選択肢は「とても強く興味をもっていた」、「少し興味をもっていた」、「どちらともいえない」、「あまり興味をもっていなかった」、「まったく興味をもっていなかった」の5つであった。

質問3は、大学主催のオープンキャンパスへの来訪経験を尋ねる質問であった。選択肢は「二回以上訪れた」、「一度だけ訪れた」、「一度も訪れていない」の3つであった。

質問4は、「大学で学ぶ心理学」に対して抱いているイメージを尋ねる質問であり、30項目から構成されていた<sup>2)</sup>。項目作成においては、心理学へのイメージや心理学概論の受講後の感想を尋ねた芳賀・川島（2015）の調査において代表的な回答であったこと、心理学の講義受講経験がない学生にも理解できること、心理学の個別テーマに言及しないことに留意した。各項目に対する評定は、「とてもそう思う（5点）」、「すこしそう思う（4点）」、「どちらともいえない（3点）」、「あまりそう思わない（2点）」、「まったくそう思わない（1点）」のいずれかを選択する5件法で行わせた。

#### 調査手続き

調査対象者にA4用紙3枚からなる質問紙（フェイスシート1枚を含む）を配布し、調査目的を説明した上で約15分間回答時間をとった。回答に際して、答えたくない質問に対しては答える義務はないこと、回答結果の匿名性は守られること、調査目的以外に回答結果が使用されることはないことも説明した。

### 3. 結果

回答に不備のあった21名を除いた177名のデータを分析対象とした。このうち初学者の学生は102名（男性67名、女性35名）であり、コミュニケーション学科の学生の占有率は43.14%（44名）であった。非初学者の学生は75名

（男性44名、女性31名）であり、コミュニケーション学科の学生の占有率は88.00%（66名）であった。心理学の専門科目がカリキュラムに組み込まれているコミュニケーション学科の学生占有率が初学者と非初学者では大きく異なったため、入学前の興味・関心について尋ねた質問1、質問2、質問3については、コミュニケーション学科の所属学生の回答のみを分析対象とした。

コミュニケーション学科に心理学の授業があることを入学前に知っていたかどうかを尋ねた質問1の回答を見てみると、「よく知っていた」または「とてもよく知っていた」のいずれかに回答した学生は、初学者（平成28年度入学生）では65.90%、非初学者（平成28年度以前の入学生）では53.02%であった。

入学前に心理学にどの程度関心を抱いていたかを尋ねた質問2の回答を見てみると、「少し興味をもっていた」または「とても強く関心をもっていた」のいずれかと回答した学生は、初学者では86.36%、非初学者では75.76%であった。

入学前にオープンキャンパスに訪れた経験を尋ねた質問3の回答を見てみると、「一度だけ訪れた」または「二回以上訪れた」のいずれかと回答した学生は、初学者では68.18%、非初学者では71.21%であった。

次に質問4の30項目に対する自己評定のデータをもとにして、学生が心理学について抱いているイメージの構造を明らかにするために、主因子法による因子分析を行った。1回目の因子分析の結果から共通性が.16未満であった1項目を削除し、残った29項目について再度分析を行った。その結果、固有値1以上の因子は8個抽出され、その推移は6.17、3.49、2.06、1.66、1.36、1.23、1.20、1.14 …となっており、スクリープロットの形状から3因子構造が適当と考えられた。そこで再度3因子を仮定して、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった項目および2つの因子に.30以上の負荷量を示した項目が8つあったため、それらを除外して、残った21項目について再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。最終的な因子パターンと因子間相関は表1に示した。3因子の累積寄与率は47.38%であり、21項目すべての因子負荷量が.40以上であった。因子間相関は、第1因子と第2因子で $r = -.08$ 、第1因子と第3因子で $r = .14$ 、第2因子と第3因子で $r = -.22$ であった。

表1 心理学に対するイメージ調査結果についての因子分析（Promax 回転後因子パターン）

項目内容	因子 I	因子 II	因子 III
人付き合いに役立つ	<u>.84</u>	-.05	.02
自分の悩みを解決することに役立つ	<u>.79</u>	-.05	.07
他者の心を理解することに役立つ	<u>.79</u>	-.01	-.05
自分が変わること役立つ	<u>.76</u>	-.08	-.02
他者の悩みを解決することに役立つ	<u>.70</u>	-.06	-.03
たのしそう・おもしろそう	<u>.63</u>	.11	-.20
自分の心を理解することに役立つ	<u>.60</u>	-.05	-.04
癒やしを与えてくれる	<u>.53</u>	.12	.23
将来の仕事に役立つ	<u>.46</u>	-.02	-.13
カウンセリングを行う	<u>.45</u>	.22	.08
優しそう	<u>.45</u>	.14	.21
理系の学問である	-.08	<u>.65</u>	.14
数学や統計学が必要とされる	.04	<u>.55</u>	-.22
科学的である	.01	<u>.55</u>	.02
実験を行う	.22	<u>.50</u>	-.11
レポートや宿題がたくさんある	-.19	<u>.44</u>	.11
アンケート調査を行う	.14	<u>.40</u>	-.06
非科学的である	-.04	.01	<u>.62</u>
うさんくさそう・あやしそう	-.24	.07	<u>.55</u>
他者の行動をあやつることに役立つ	.25	-.03	<u>.51</u>
占いやオカルトと関係がある	.19	-.17	<u>.46</u>
因子間相関	I	II	III
	I	—	-.08
	II	—	—
			-.22

第1因子には、自分自身や他者の心の理解に役立つ、人付き合いや将来の仕事に役立つ、癒やしや優しさを与えてくれる、といった実生活における有用性と関連する項目が多く含まれていた。第2因子は、実験を行ったり数学や統計学を駆使するといった心理学の実証科学的側面に関連する項目で構成されていた。そして第3因子は、心理学に対する通俗のかつ非科学的な印象と関連する項目で構成されていた。こうした特徴をふまえ、第1因子は「役立ち」因子、第2因子は「実証科学」因子、そして第3因子は「似非科学」因子と命名した。

内的整合性を表す  $\alpha$  係数は、「役立ち」因子で .88、「実証科学」因子で .67、「似非科学」因子で .63 であった。「実証科学」因子と「似非科学」因子の  $\alpha$  係数は十分に高い値とはいえなかったが、心理学初学者が抱きやすい印象が数多

く含まれており、身近な現象を研究対象とする心理学という学問に独特の二面性が現れている因子でもあるので、以降の分析の対象とした。

次に、30項目のそれぞれについて初学者と非初学者の平均評定値を求めて、有意差検定（*t* 検定）の結果とともに表2に示した。「役立ち」因子に属する項目では、「たのしそう・おもしろそう」以外の10項目で初学者の平均評定値

表2 初学者と非初学者の平均評定値の比較および *t* 検定の結果

因子	項目内容	初学者	非初学者
役立ち	人付き合いに役立つ	4.15	3.84 *
	自分の悩みを解決することに役立つ	3.79	3.63
	他者の心を理解することに役立つ	4.26	3.97 *
	自分が変わること役立つ	3.88	3.65
	他者の悩みを解決することに役立つ	4.17	3.89 *
	たのしそう・おもしろそう	3.99	4.11
	自分の心を理解することに役立つ	4.25	4.07
	癒やしを与えてくれる	3.15	2.96
	将来の仕事に役立つ	4.00	3.72 *
	カウンセリングを行う	4.10	4.03
	優しそう	2.86	2.76
実証科学	理系の学問である	2.98	3.44 **
	数学や統計学が必要とされる	3.43	4.15 ***
	科学的である	3.31	3.67 **
	実験を行う	3.49	4.37 ***
	レポートや宿題がたくさんある	3.48	3.83 *
	アンケート調査を行う	3.70	4.22 ***
似非科学	非科学的である	2.73	2.37 *
	うさんくさそう・あやしそう	2.53	2.19 *
	他者の行動をあやつることに役立つ	3.45	2.78 ***
	占いやオカルトと関係がある	3.10	2.35 ***
	つまらなそう・おもしろくなさそう	2.27	2.04
	生物学や脳科学が必要とされる	3.67	3.92
	大学での勉強に役立つ	3.76	3.69
	むずかしそう	4.23	4.13
	文系の学問である	3.17	2.71 **
	心理検査を行う	4.13	4.16
	簡単そう	2.02	1.97
	他者の嘘を見破ることに役立つ	3.70	2.93 ***
	テレビや雑誌でよく見かける	3.50	3.56

\* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$ , \*\*\* :  $p < .001$

が非初学者よりも高かった。特に「人付き合いに役立つ」、「他者の心を理解することに役立つ」、「他者の悩みを解決することに役立つ」、「将来の仕事に役立つ」の4項目では有意差が確認された。さらに「役立ち」因子ではないが、「大学での勉強に役立つ」の平均評定値も初学者のほうが高かった。

「実証科学」因子では、6項目すべてにおいて初学者よりも非初学者の平均評定値が有意に高かった。またこの因子に属してはいないが、「生物学や脳科学が必要とされる」においても同様に非初学者の平均評定値が高く、反対に「文系の学問である」においては非初学者の平均評定値が有意に低いという結果が得られた。

「似非科学」因子に属する4項目においては、初学者よりも非初学者の平均評定値が有意に低かった。同様の結果は、この因子には属していないが「他者の嘘を見破ることに役立つ」でも確認された。

最後に、30項目のそれぞれについて初学者と非初学者の男女別平均評定値を求めて、有意差検定（ $t$ 検定）の結果とともに表3に示した。有意な性差が認められたのは、初学者では「他者の嘘を見破ることに役立つ」の1項目のみであり、非初学者では「人付き合いに役立つ」と「自分の心を理解することに役立つ」の2項目のみであった。

#### 4. 考察とまとめ

質問1と質問2の分析結果から、コミュニケーション学科所属の回答者の少なくとも半数以上は大学で心理学の授業を受講できることを入学以前に認知しており、心理学に対して強い興味や関心を抱いていたことが示された。また、心理学カリキュラムの認知率と心理学に対する興味・関心のいずれもが平成28年度以前の入学者（本研究における非初学者）よりも平成28年度入学者（本研究における初学者）で高かったことから、受験生の心理学の学習意欲が年を追って上昇していると見ることもできる。同様の上昇傾向はオープンキャンパスの来訪率（質問3）には見られなかったが、それでも回答者の約70%が少なくとも1回はオープンキャンパスに訪れていることが示された。

コミュニケーション学科に心理学の専門カリキュラムが導入されて3年目を



表3 平均評定値における性差および *t* 検定の結果

因子	項目内容	初学者		非初学者	
		男性	女性	男性	女性
役立ち	人付き合いに役立つ	4.13	4.17	3.65	4.10 *
	自分の悩みを解決することに役立つ	3.81	3.77	3.52	3.77
	他者の心を理解することに役立つ	4.22	4.31	3.81	4.19
	自分が変わることに役立つ	3.88	3.89	3.58	3.74
	他者の悩みを解決することに役立つ	4.24	4.03	3.82	4.00
	たのしそう・おもしろそう	3.97	4.03	4.02	4.23
	自分の心を理解することに役立つ	4.22	4.29	3.89	4.32 *
	癒やしを与えてくれる	3.07	3.29	2.80	3.19
	将来の仕事に役立つ	4.00	4.00	3.68	3.77
	カウンセリングを行う	4.21	3.89	3.93	4.16
優しそう	2.81	2.97	2.75	2.77	
実証科学	理系の学問である	2.94	3.06	3.39	3.52
	数学や統計学が必要とされる	3.39	3.51	4.18	4.10
	科学的である	3.31	3.31	3.66	3.68
	実験を行う	3.45	3.57	4.32	4.45
	レポートや宿題がたくさんある	3.48	3.49	3.98	3.61
	アンケート調査を行う	3.72	3.66	4.16	4.29
似非科学	非科学的である	2.79	2.63	2.23	2.55
	うさんくさそう・あやしそう	2.55	2.49	2.34	1.97
	他者の行動をあやつることに役立つ	3.55	3.26	2.88	2.65
	占いやオカルトと関係がある	3.09	3.11	2.25	2.48
	つまらなそう・おもしろくなさそう	2.34	2.11	2.14	1.90
	生物学や脳科学が必要とされる	3.72	3.57	3.86	4.00
	大学での勉強に役立つ	3.73	3.80	3.57	3.87
	むずかしそう	4.24	4.20	4.20	4.03
	文系の学問である	3.15	3.20	2.77	2.61
	心理検査を行う	4.19	4.00	4.09	4.26
簡単そう	2.00	2.06	1.84	2.16	
他者の嘘を見破ることに役立つ	3.87	3.37 *	2.95	2.90	
テレビや雑誌でよく見かける	3.52	3.46	3.57	3.55	

\*:  $p < .05$

迎えたが、受験生の認知率は徐々に上昇し、心理学の学習意欲が高いと思われる学生が実際に心理学の授業を受講していることが以上の分析結果から示唆される。また本研究で質問紙調査を実施した「心理学概論Ⅰ」を受講して調査に回答した1年生（本研究における初学者）は44名であり、平成28年度にコミュ

コミュニケーション学科に入学した学生の47.83%を占めている。平成28年度現在、三重県内で心理学が専門的に学べる四年制大学は7校中3校のみであり、そのうち津市以南の大学は皇學館大学1校のみである。今後少子化が進み大学経営はますます困難になることが予想されるが、三重県南勢地方に居住する大学受験生にとって、「心理学を専門的に学べる地元の大学」としてコミュニケーション学科が果たすべき役割は大きいと考えられる。

質問4の結果について因子分析を行った結果、受講生が心理学に対して抱いているイメージは、「役立ち」因子、「実証科学」因子、「似非科学」因子の3つから成り立っていることが示された。このうち「役立ち」因子には、自己理解や自己実現、他者理解、そして対人関係の形成に関係する項目が含まれていた。こうした特徴は芳賀・川島（2015）の研究でも確認されており、大学生が心理学を学ぶ最も一般的な動機であるといえるだろう。

心理学の学問的特徴については、「実証科学」因子と「似非科学」因子が別々に抽出されたことから、相反するふたつのイメージが併存していることが推測される。学問としての心理学とは、実験や調査によって集積された経験的事実を数学や統計学の手法を駆使して分析し、理論や仮説を検証していく営みである。しかし、その研究対象は“見えない”心や“つかみどころのない”心であり、占いやオカルトのような非科学的行為が入り込む余地は大きい。脳科学の隆盛によりfMRIやNIRSといった脳機能イメージング法を用いた研究に触れる機会は増加し、心の可視化が進められてきた。しかしその一方で、血液型占いや相性診断が自己形成や対人関係で悩みの絶えない大学生の関心を引き続けていることも事実である。本調査の結果には、こうした心理学のもつアンビバレントなあやうさが示されているのかもしれない。

学習経験による心理学のイメージ変化の特徴を分析するために、初学者と非初学者の質問4の30項目の平均評定値を比較したところ、「役立ち」因子と「似非科学」因子に属する項目では非初学者で評定値が低下する傾向が認められた。またその傾向は「似非科学」因子項目で顕著であった。反対に「実証科学」因子項目の評定値は非初学者で顕著に上昇した。この結果は、大学での学習経験を通じて「実証科学」として心理学を認識する姿勢が生まれ、入学前に抱いて

いた「似非科学」としての誤った先入観が修正されていったことを示している。誤った先入観が形成されやすいという欠点は、日常生活における身近な現象を研究対象とする心理学の宿命といえるだろう。したがって、入学後の専門的学習の第一歩として、「人間の行動の法則性を科学的に探る学問（小川・斎藤・坂田・吉崎，2013）」という心理学の実像を理解させることは非常に重要な意義をもつといえる。

その一方で、「役立ち」因子に属する「人付き合いに役立つ」、「他者の心を理解することに役立つ」、「他者の悩みを解決することに役立つ」、「将来の仕事に役立つ」の4項目に対する評定は非初学者で有意に低下しており、心理学の学習によって失望感を味わっている学生がいることを示唆している。高島・中村（2002）が指摘するように、初学者は心理学の実用性に対して漠然とした興味や期待を抱いている傾向が強いといえる。そうした学生が心理学の講義を経験することで、「心理学は役に立たない」といった感想をもってしまう可能性は十分に考えられる。しかし、こうした初学者の失望感について考察する場合、講義を行う教員側の問題も見逃すことはできない。初学者の学習意欲を削ぐことなく魅力的な授業を展開し、実証科学としての心理学の実像を伝え、心理学学習の意義と具体的なキャリアパスを呈示することが教員側には要求されるだろう。

芳賀・川島（2015）および本研究では、学生の心理学に対するイメージ、学習経験の影響、および今後の授業改善のポイントについて、心理学専門カリキュラム導入後の約2年半にわたる調査をもとに考察してきた。今後は、講義科目よりも自主性や能動性が要求される実験実習や卒業研究を経験することで学生の心理学に対する意識がどのように変化していくのか、4年間の心理学学習の意義を何に見出すのかといった問題についても引き続き調査を行っていきたい。

## 引用文献

芳賀康朗・川島一晃（2015）．学部における心理学専門教育の導入に関する一研究  
皇學館大学紀要, 54, 33-54.

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（2）（芳賀・川島・望木）

小城英子・坂田浩之・川上正浩（2010）. 不思議現象に対する態度における心理学教育の効果 日本心理学会第74回大会発表論文集, 101.

工藤与志文・鈴木健太郎・小林好和（2004）. 大学生の心理学に関する「素朴概念」— 一本学人文学部生を対象にして— 札幌学院大学人文学会紀要, 76, 1-16.

松井三枝（2000）. はじめて学ぶ「心理学」に対するイメージの変化—「心の科学」受講前後の調査から—富山医科薬科大学一般教育研究紀要, 23, 63-68.

小川一美・斎藤和志・坂田陽子・吉崎一人（2013）. スタートアップ「心理学」高校生と専門的に学ぶ前のあなたへ ナカニシヤ出版.

高島直子・中村延江（2002）. 美容専門学校生の心理学観（Ⅱ）:1998年（五十嵐他, 1999）との比較 山野研究紀要, 10, 59-66.

## 註

- 1) 三重大学医学部医学・看護学教育センター 皇學館大学文学部コミュニケーション学科非常勤講師
- 2) 質問4で使用した30項目の質問は表2に示した。

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（2）（芳賀・川島・望木）

A Study on the Introduction of a Psychology Curriculum  
into Undergraduate Education (2).

The Effects of Learning Experience on the Changing Images of Psychology.

Yasuaki HAGA, Kazuaki KAWASHIMA, Ikuyo MOCHIKI

Abstract

This study aimed to reveal the structure of images that undergraduate students have for psychology, and to investigate how the images change through the learning experience or lectures. An exploratory factor analysis was carried out using data from 177 university students (102 novice students of psychology and 75 experienced students), and three factors were extracted: “Usefulness” (11 items), “Positive science” (6 items), and “Pseudo science” (4 items). Further analysis showed that the usefulness of psychology was estimated much higher in novice students, and the positivism of psychology was better recognized in experienced students. These results suggest that the learning experience certainly promotes understanding of the scientific features of psychology, but the novice students may be disappointed with the content of the lectures. It is necessary for faculty members to clearly convey the significance of learning psychology to the students without weakening their motivation.

Keyword : image for psychology, education of psychology, novice student

